Mother's Diary

A. Mother

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｍｏｔｈｅｒ's　Ｄｉａｒｙ

【Ｎコード】

Ｎ２４３２Ｌ

【作者名】

Ａ．　Ｍｏｔｈｅｒ

【あらすじ】

溺愛する息子に家出をされ、正気を失いつつある母親の、子離れ出来ない様が綴られた一種の狂人日記。自責・懺悔・伝え切れなかった言葉を日記に綴る。

Week 1

今日、息子が家を出て行った。二度と帰らないという決意を感じさせながら…。
私は何も言うことができず、背中を向けたままドアの閉まる音を聞いた。
何故止めなかったのか？
私に止めることができるとは思えなかったから。もう母親としての影響力は何も残っていないから。
息子が、自分の行動には自分で責任を持つべき年齢に達しているから。にもかかわらず、いつまでも子供染みた自論を掲げるから。自ら傷ついて、自分の愚かさに気付く以外に、息子を救える方法はないと思うから。
今の私に何ができるだろう？
何もできない。何をしても効果がない。何をしても裏目に出る。何をしても息子の心情を逆撫でし、より気持ちを荒ませることになる。情けない母親だ。
息子以上に道を誤ってきているのは私なのだろう。
私は、自分の愚かさに気付いているのか？
多分、気付いている。否、十分には気付いていないのだろう。だから何度も同じ失敗を繰り返したのだろう。その結果、息子が家を出て行ったのだろう。
あるいは、気付いていても、修正の仕方が見つけられなかった。だから、息子が家を出て行ったのだろう。
愚かさに気付くだけでは、人は救われないのか？
息子も、私も、自分の愚かさに気付きながら正しい道を選べない人間。迷い続ける人生を死ぬまで歩み続けるのではないだろうか？
ならば、人生が短いものであることを望む。この長寿の国で…。

私の世界の中心は、いつも息子だった。今も、これからも、私の胸の中には息子の顔・声・しぐさ・肌の暖かさしか浮かんでこないだろう。
頭のイカレタ母親だ。
イカレタついでに、私は自分だけの世界を作ろう。
そこには、私の話を素直に聞いてくれる息子がいることにしよう。
いろいろな話をしよう。大好きな息子と…。

【某月某日- 君が家を出て行った日】
今日は、私の人生の中で最も辛い日になるのかもしれない。
今まで、私は君を随分苦しめてきたんだね。私の君に対する期待が、君の重荷になってるんだね。
私は、ようやくその事に気が付いたよ。もっと、早く気付いて、君の気持ちを軽くしてあげれたら良かったのにね。ごめんね、出来の悪い母親で…。
私だって、人の期待に答えれるような人間じゃないのにね。なのに、君にいくつもの理想を押し付けていたよね。優しくあれ、強くあれ、賢くあれ…。言うのは簡単だけど、実行するのは難しいよね。
そして、君は失敗は許されないと思い込んでいたみたいだね。君の失敗を見る度に、私が小言を言ったからかな？
君の素直さに、時々唖然とするよ。私の小言を、全て真に受けたりはしないよね。

失敗は、何度でもすれば良いんだよ。失敗した事がない人なんて、この世の中に一人もいないはずだよ。
私の小言の本意は、失敗しても良い、失敗したら反省して、同じ失敗を繰り返さない努力をすれば良い。それでも、また失敗したなら、それは、それで良い。また反省して、また努力して欲しい。何度でも、反省して、努力して欲しい。という意味だったんだよ。

でも、今まで「失敗しても良いよ」なんて伝えたことなかったね。
「失敗はダメよ」って、言ったことはあったかもしれないね。そして、君はその言葉を１００％受け止めたんだよね。
ごめん、言葉不足だった。

Week 2

【某月某日】

君が家から姿を消して、私の生きる気力も消えているはずなのに、それでも毎朝、当たり前のように目覚めてしまうことが腹立たしいよ。

今でも、この家のあちこちで君の気配を感じるよ。
君の部屋から、君の寝息が聞こえるし、寝返りや咳払いした瞬間を感じる。
「腹減った。晩飯なに？」と言って、食卓の椅子に座る君の姿が見えそうな気がする。
最後に、一緒に食事をしたのはいつだったかな？何を食べたんだったかな？
その時、私はそれが二人の最後の晩餐になるとは気付かずに、それまで同様、君に対して諸々の苦言を呈していたんだろうね。
最後に、二人が笑顔で食卓を挟んだ時は、さらに遡るんだろうね。
我が家の経済力を考慮しながら、毎日の献立を考えていた頃は、そんな日々から開放されることを夢見ていたけど、実際に開放された今は、ただただ虚しいだけなんだね。

最後に、君の心からの笑顔を見たのはいつだったんだろう？
私が思い出せる笑顔の君は、なぜか少年姿だよ。
以来、君の笑顔を見ていなかったということなのかな。
私を内側から温めてくれた君の笑顔を、もう見ることはできないのかな。
私は、とても幸せだったんだね。そして、もうその時には戻れないんだね。

【某月某日】

昨夜、とても久しぶりにお酒を飲んだよ。
君が中学生の時に、私はやけ酒を飲んで酔いつぶれてしまった事が何度かあるよね。
二人が同時に、大きな心の傷を負った頃だよ。
当時、私には困難を自力で乗り越える強さがなかった。
いつも、誰かに、何かに助けて欲しいと思ってた。
だけど、君はそんな気弱な私の姿に、さらに心を痛めていたみたいだよね。
君に「酔っ払いは嫌いだ。」と言われたんだけど、覚えてるかな？
あれ以来、アルコールはほとんど飲んでなかったんだよ。
私までが、君を悲しませるような事をしてはいけないと思って。
君は辛いことがあっても、お酒を飲める年齢じゃなかったから、じっと耐えていたんだよね。

でも、昨日は、またお酒の力を借りたくなった。
私は、たいした成長をしてないんだね。
本当に久しぶりのお酒だったから、少量でさっさと酔っちゃったよ。
あっという間に、頭の中が朦朧として、何故か声を出して笑ってた。
自分自身が、白塗りの頬に大きな涙の粒を描いたピエロに見えて笑えた。

酔っ払った勢いで、君のベッドに入ってみたんだ。
布団には、まだ君の匂いが残ってる。
それは大人の匂いなんだけど、私が思い出すのは、
両手を広げて抱きついてきてくれた、幼い頃の君の姿だった。
あの頃、君は確かに、私の事を愛してくれていたんだよね？

君が言ってくれた「ママ大好き」は疑わなくても良いんだよね？
今は、君の苛立ちの対象でしかないとしても、心から愛された時があると信じたいよ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2432l/

Mother's Diary

2010年10月20日19時16分発行